

# 『ダントンの死』における ビューヒナーの宿命論の変化

竹内 拓史

## 1. 宿命論の手紙

ゲオルク・ビューヒナー（1813-1837）が祖国ドイツで実際的な革命運動を行うのは、1834年の3月頃からであると推測される。その頃にビューヒナーが提唱し、ギーセンに政治的の秘密結社「人権協会」が設立される。<sup>1)</sup> その後故郷のダルムシュタットに帰り、4月にはそこに人権協会の支部を設立する。<sup>2)</sup> その間の3月半ばからは、農民向けの政治的パンフレット『ヘッセンの急使』を書き始め、<sup>3)</sup> それを配る計画を仲間達と練っていた。そのパンフレットは、貴族の横暴ともいえる搾取と、それによる自分達の不当に強いられた窮乏を農民達に知らせ、さらには農民の圧倒的な数的優位を説き革命へと向かわせようというものであった。

しかしここで注目したいのは、ビューヒナーがそのような革命運動を始める直前に書いたと推定される、ある一通の手紙である。その手紙は彼の婚約者に宛てて書かれたものである。その手紙には次のようなことが書かれている。

「僕は革命の歴史を勉強した。恐ろしい歴史の宿命論に打ちのめされたように感じた。人間の本性の内には恐ろしいほどの同一性があり、人間の状況には逃れることのできない力があるのが見えてきた。この力は皆に与えられながら、誰にも与えられていない。一人一人の人間は波の上の泡にすぎず、偉業もほんの偶然のものであるし、天才の支配も一種の人形劇で、鉄の法則に対する滑稽な悪あがきにすぎない。私たちはこの法則を認識するのがせいぜいで、それを支配することは不可能だ。歴史上の華々しいがどうしようもない人たちにも、歴史の街角に立っている人にも、僕はもはや頭を下げる気はしない。僕は自分の目を血に慣れさせた。しかし僕はギロチンの刃じゃない。必然とは呪いの言葉だ。人間はこの言葉の洗礼を受けてきた。〈躓きは必ず来たるべし。しかし躓きをもたらす者は禍なり。〉（引用者注：聖書マタイ伝18章7節）— この言葉は身震いするほど恐ろしい。僕らの内で、偽り、殺し、盗みを働くものはなんなのだろう。もうこれ以上このことを考えるのはやめよう。」<sup>4)</sup>

(1834年1月の中頃から終わりにかけて 婚約者に宛てて)<sup>5)</sup>

この手紙は、いわゆる「宿命論の手紙」と呼ばれるものである。

ビューヒナー研究においては、作品解釈にしろビューヒナーの思想にしろ、多くの対立する解釈が並立していて、一義的な解釈に到達するのは非常に困難である。ビューヒナーに関して特にそのような傾向が顕著である理由は、いくつか挙げられる。一つには彼が残した作品が非常に少ないということである。しかもその少ない作品のうち、『ヴォイツェク』は未完のままに終わっている。このことは、彼の作品を解釈する際に他の作品の助けをかりようにも、その助けが少ないということの意味する。加えて自分の作品に対する彼自身の註釈もあまり残っていない。

さらに彼の夭折が原因としてあげられるであろう。23歳でこの世を去った彼の死は、あまりに早すぎるものであった。しかも彼はその短い生のうち、革命家、作家、自然科学者、哲学者などの多様な面を持ち合わせていた。

あまりに短い人生と、数少ない、しかしながら現在も我々を魅了し続ける文学作品、そして多面的な彼の人生、それらのものが相まって彼に関する解釈は複雑な様相を呈している。この手紙に関してもそれは例外ではない。それどころか、むしろこの「宿命論の手紙」こそが、ビューヒナーの生をより複雑に見せている一つの大きな要因と言えるかもしれない。

書かれた日付もいまだ確定されていないこの手紙は、彼が認識したフランス革命の現実、宿命論について書かれたものであり、その一部は彼の最初の戯曲である『ダントンの死』に、主人公の台詞として出てくる。それらのことを考えると、この手紙が彼の創作や世界観と何らかの関係があるのではないかと考えるのは当然のことであろう。さらに、この手紙からはフランス革命の現実を知り、宿命論を認識したビューヒナーが、大きな精神的ショックを受けていることが読み取れる。

これに関しては、トーマス・ミヒャエル・マイヤーのような異論もある。彼はこの手紙をビューヒナーの深刻な心理状態を表すものではないと考える。その代わりに彼が打ち出した論は、この手紙は恋人であるミンナに手紙を出せない言い訳の手紙であるというものである。つまりトーマス・ミヒャエル・マイヤーは、ビューヒナーは当時、革命運動に没頭し恋人に手紙を出す余裕がなく、そのことに対するミンナの非難を、このように精神状態の危機を告げる手紙を書き送ることでかわそうと考えた、というのである。<sup>6)</sup>

しかし「宿命論の手紙」の前後に書かれたいくつかの手紙も、彼の精神状態がこの時期、落ち込んでいたことを示している。

「僕は何回も手紙を書いた。おそらく君は僕の手紙を見てくれただろう。僕は自分自身に対して愚痴ったり、他人の悪口を言ったりしてた。その二つのことから僕の具合がどれほど悪いか君にもわかるだろう。僕は君まで病院に引っ張りこみたくはなかった。それで黙っていたのだ。

君は、二年の幸せな歳月やその二年を幸せにしてくれた全てのものへの憧れか、もしくはここで僕が生活する上でのわずらわしい関係とかが、僕を不幸な気持ちにさせていると決めつけてしまうかもしれない。僕が思うにはその両方である。時々僕は君たちの山々に本当に郷愁を感じる。ここでは全てのものがあまりに狭くて小さいのだ。自然や人々、こまごまとした環境、それらに僕は一瞬たりとも興味を持つことができない。十月の終わりに僕はここからギーセンに移った。五週間、僕はそこで半ばつまらないものの中で、半ばベットの中で過ごした。脳膜炎の発作が始まったのだ。病気は初期のうちに抑えられた。でも僕はちゃんと回復するように、すぐに無理やりダルムシュタットに帰された。僕は新年までここに滞在しようと考えている。そして一月の五日か六日には再びギーセンに向けて出発しようと思っている。」<sup>7)</sup>

(1833年12月9日　　アウグスト・シュテーパーに宛てて)

「僕は手紙を渴望している。僕は一人ぼっちだ。まるで墓の中にいるようだよ。君の手が僕をよみがえらせてくれるのはいつのことなんだろう。友達も僕のもとを去っていく。僕らは耳が聞こえないみたいに、お互い耳もとで喚き合う。本当に僕らの耳が聞こえなければと思うよ。そうすれば僕らはお互いをじっと見つめ合うことぐらいはできるのに。最近僕は、ほとんど誰の顔でもじっと見つめると、涙が出てくるんだ。これは牛眼といって、じっと見ていると時々起るものなんだ。僕は頭がおかしいと言われているよ。なぜなら僕が、自分は六週間でよみがえるが、まずは急便馬車に乗って天国行きをやるんだと言ったからなんだけどね。達者でね、いとしい君よ。僕を見捨てないでくれ。心痛のため僕は君にからんでしまうんだ。一日中僕の心は痛んでいるんだ。かわいそうな君、君も僕と同じことをして仕返しをするんだろうね。」<sup>8)</sup>

(1834年2月中頃から終わりにかけて　　婚約者に宛てて)

「僕は、表面上は落ち着いていました。しかし僕は深い憂鬱に落ち込んでいました。それは政治情勢が僕を締めつけていたのです。僕は、自分が下僕を持った下僕であることを、そして腐りきった王侯たちや、はいつくばっている公僕の貴族主義のお気に入りであることを恥じていました。僕はギーセンに来て最低の状態になり、嫌悪感により病気になったのです。」<sup>9)</sup>

(1834年3月30日頃 家族に宛てて)

さらに、この「宿命論の手紙」をビューヒナーが書いたのは、彼自身も革命運動の実践へ進もうという時期であった。そのような時期にいた彼には、フランス革命の残虐、残酷な現実が大きなショックを与えたと考えるのは当然であろう。また、ギムナジウム時代に書いた「400人のプフォルツハイム人の英雄的死」という作文で、ビューヒナーは次のように述べている。

「崇高なのは、自然とたたかう人間を見ることである。彼は強大な力でもって、荒れ狂う自然の力の猛威に抵抗し、精神の力を頼みに自然の力をおのれの意志に従わせる。

しかしさらに崇高なのは、自分の宿命とたたかう人を見ることである。彼は勇敢にも時の歯車を掴もうと手をのばす。そして自己の目的を成すために、彼の持つ最も崇高なもの、彼の全てを賭すのである。」<sup>10)</sup>

またほぼ同じ文章が、上の作文の約一年後に行なった「ウティカのカトー」というスピーチに使われている。

「偉大であり崇高であるのは、自然とたたかう人間を見ることである。彼は荒れ狂う自然の力の猛威に激しく抵抗し、精神の力を頼みに自然の荒々しい力をおのれの意志に従わせる。しかしさらに崇高なのは、自分の宿命とたたかう人を見ることである。彼は勇敢にも世界の歴史に手をのばす。そして自己の目的を成すために、彼の持つ最も崇高なもの、彼の全てを賭すのである。」<sup>11)</sup>

このようなことが繰り返し述べられているということは、彼には幼い頃から英雄主義的、理想主義的などころが多分にあったということである。そしてそのようなビューヒナーに、「宿命論の手紙」に見られるような、英雄や天才を

も含む人間そのものの無力さ、同一性の認識が大きなショックを与えたであろうことは想像に難くない。

ではビューヒナーがショックを受けたのは、どのようなことに対してだったのであろうか。さらに詳しく見てみたい。

まず彼は、「革命の歴史を勉強した」<sup>12)</sup>と書いている。この革命とはもちろんフランス革命のことであろう。つまりこの手紙には、フランス「革命の歴史を勉強した」ビューヒナーが、「歴史の宿命論に打ちのめされた」様子が書かれているのである。ビューヒナーはフランス革命を勉強して何を知ったのか。それは一人一人の人間の無力さであり、偉業を行った歴史上の英雄や天才の無力さである。おそらくビューヒナーが見たものは、次々と裏切られていく社会変革の夢、そして民衆の前で次々と首を切られていく昨日の英雄たちの姿といった、革命を実際に先導してきた革命家たちの、そのような滑稽なまでの悲惨さや無力さであったのだろう。上述したように、幼い頃から英雄主義的、理想主義的などころがあったビューヒナーにとっては、このようなことは大きなショックを与えたものと思われる。

そしてこれは、革命だけにとどまらない彼の世界観の認識へと至る。彼はこのフランス革命の現実から、「人間の本性の内」にある「同一性」と、人間には「支配することは不可能」な「鉄の法則」の存在を認識するのである。

さらに彼は「僕はギロチンの刃じゃない。必然とは呪いの言葉だ。」と書いている。ここから読み取れるのは、革命においては血が流れるのは不可避であるが、革命家がそのようなことを行わなければいけないということに対するビューヒナーの葛藤である。英雄としての革命家だけではなく、避けられ得ない政治犯罪を行い、血に染まった革命家の姿は、これから革命へ向かおうというビューヒナーに大きなショックを与えるものだった。

ビューヒナーは、幼い頃父に革命の英雄の話をしばしば聞かされたというが、改めて見たフランス革命はそのように彼に全く違った姿を見せた。それは彼にショックを与えるに十分すぎるものであった。そして大きなショックを受けた彼の認識は、革命だけに制限されない、この世界そのものへの認識へと至ったのである。それはつまり、この世の全ては「歴史の宿命」と「人間の本性」に従うものであり、そこに人間の自由意志が入り込む余地は無く、一人一人の人間は、たとえどんな偉大といわれる人であっても、あまりにも小さく無力な存在であるという認識である。また、そこから英雄や天才をも含む人間そのものの無力さ、同一性をも彼は認識している。そして前述したように、この手紙からはビューヒナーがフランス革命の現実だけではなく、そのような宿命論を認識することによっても大きな精神的ショックを受けているのが読み取れる。

トーマス・ミヒャエル・マイヤーは、ビューヒナーがここで大きなショックを受けているのは市民革命の限界であった、と述べている。つまり、フランス革命において、市民革命が結局はブルジョワジーの支配に終わってしまったことに対する失望であったというのだ。<sup>13)</sup> しかし谷口廣治氏が述べているように、政治運動の本場であるフランスに二年間留学しながら、フランス革命後の左翼にとって最も切実な問題の一つであったブルジョワジー支配の問題に、ビューヒナーがそれまで気づかなかったというのはあまりにも不自然である。<sup>14)</sup>

またハウシルトも、革命の結果が結局ブルジョワジーの利益追求に終わってしまったという認識をビューヒナーが持ち、それがビューヒナーが衝撃を受けた「鉄の法則」や「逃れることのできない力」の認識に通じていく一つの原因であると考えている。<sup>15)</sup> 革命の思いもよらなかった現実から、「鉄の法則」などの世界観へと通じていくという考えは私の考えと同じであるが、この「宿命論の手紙」から見るとは、むしろハウシルトも挙げている、革命の英雄達の本当の姿、無力さというものが、ビューヒナーにそのような世界観を認識させる契機となったのではないだろうか。その無力さの一つの例として、革命のブルジョワジー支配という結末が考えられるが、この「宿命論の手紙」から直接、革命後のブルジョワジーの支配に対する衝撃を読み取り、それをビューヒナーが受けたショックの主要な要因と考えるのは無理がある。

しかも前述したようにビューヒナーの認識は、革命だけにとどまっていたのではない。彼の認識は、そこからさらに世界そのものの認識へと拡がり、その結果さらにショックを受けているのである。

そのショックの大きさは、ビューヒナーのそのような認識が一時的なものではないことから推察できる。ここで見られる宿命論的な考えは、約一ヵ月後の手紙では、人間は環境によって決定されるのであり、それは人間の力の及ばないものだという、これもまた人間の自由意志を否定した、環境決定論とでもいべき形をとって再び現れているのである。

「ばかになるまい、犯罪者になるまいと考えても、それは自分の力ではどうにもならないのです。環境が同じであったら、私たちは誰でも同じような人間になるだろうし、環境は人間の力の及ばないところにあるのですから。」<sup>16)</sup>

(1834年2月 家族にあてて)

この手紙においては、前後の文脈から考えると、彼の宿命論的な考えは、否定的というよりはむしろ弱者である大衆をかばうために使われていると見なすのが妥当であろう。しかし、形は違えど、宿命論的な考えが彼の中にその後

も残り、根付いていたことは確かである。これらの手紙のおよそ一年後に書かれた彼の最初の戯曲『ダントンの死』の中に、「宿命論の手紙」で認識されている必然性や宿命論といった概念が、主人公ダントンの台詞として出てくることからそのことは分かる。

そしてさらには亡命後の彼の作品『ヴォイツェク』と『レオンスとレーナ』の二つの戯曲の主題も、この宿命論、人間の自由意志の否定と関連していると言える。『ヴォイツェク』の主人公ヴォイツェクは、どこからともなく聞こえてきた、しかしながら抗うことのできない声に従って殺人を犯す。この世には人間の理性では捉えられない、人間の意志の力が届かないものが存在するということがここでは表されている。そして彼はそれに動かされ殺人を犯してしまうのである。ここに描かれているのは、「宿命論の手紙」では「歴史の宿命」、「人間の本性」と表された、この世を動かす巨大な力を持つなにかであり、それに支配される人間の無力さである。

また『レオンスとレーナ』においては、主人公である王子レオンスと王女レーナは偶然に出会い、恋に落ち、結ばれるが、それらは全て予定調款的に収まる。つまり彼らの偶然もそうなる宿命であったというわけである。偶然も宿命であった、そう考えると喜劇であるはずのこの戯曲も宿命論的な不気味さを感じさせるものとなる。

このように、彼を書くものは一貫して「宿命」という概念が中心となっていることから、「宿命論の手紙」に見られる認識は、ビューヒナーにとって一時的なものではなかったと考えられる。

しかしこのように「宿命論の手紙」を書いた時は、宿命論を認識し大きな精神的ショックを受けたビューヒナーであったが、その後この宿命論の認識は変化していったと考えられる。「宿命論の手紙」と同じ内容の台詞が出てくるビューヒナーの最初の戯曲『ダントンの死』を中心に、彼の宿命論がどのように変化していったのかを次に考えてみたい。

## 2. 『ダントンの死』における宿命論の変化

『ヘッセンの急使』による革命運動が失敗に終わったビューヒナーは、逮捕を恐れ亡命をしようと考える。そのための資金調達として書いた戯曲が『ダントンの死』である。

亡命直前に書き上げられたこの戯曲の中には、前述したように、「宿命論の手紙」に見られるのとほぼ同じ意味の言葉が、主人公ダントンの台詞として出てくる。第二幕の中頃、ダントンとその恋人ジュリーとの会話である。

ダントン：我々はやつらをたたいた。あれは殺人じゃなかった。内部の者に対する戦いだったんだ。

ジュリー：あなたは祖国を救ったのよ。

ダントン：そうだ、確かに救った。あれは正当防衛だったんだ。我々はやらねばならなかったのだ。十字架にかかった者（引用者注：キリストのこと）は気楽に「躓きは必ず来たるべし。しかし躓きをもたらす者は禍なり」などと言っていた。必ず来たるべし。この必ずってやつだったんだ。必然という呪いのかかった手を呪おうと思うやつがいるだろうか。必然なんてやつを口にしたのは誰だ。僕らの心の中であって淫売をし、嘘をつき、盗みや人殺しをするものは一体何なんだ。僕らはみんな操り人形だ。分からない力に操られている。僕ら自身は無だ。無なんだ！亡霊どもが戦っている剣にすぎない。おとぎ話によくあるように、戦っているものの手さえも全く見えない。やっと僕は落ち着いた。<sup>17)</sup>

ここでのダントンの台詞は、内容的には「宿命論の手紙」に書かれていることとほとんど同じであり、「宿命論の手紙」に書かれたビューヒナーの認識が、ダントンを通して吐露されているようにも見える。しかし、この台詞が戯曲『ダントンの死』の中に、ダントンの台詞として出てきたということを考慮すると、ここにはビューヒナーの宿命論に対する認識の違いが見えてくる。

ビューヒナーは、ダントン同様、宿命論を認識し革命運動に失敗して身を滅ぼしそうになった経験がある。宿命論を認識し革命の中に散っていくダントンの姿に、ビューヒナーが革命運動前後の自分の姿をある程度重ねているというのは、十分に考えられることである。しかし、「宿命論の手紙」を書いた時のビューヒナーは、ただただ宿命論の認識によってショックを受けるばかりであったが、『ダントンの死』においては、それをダントンの台詞として書くことで自分から距離をおいて見られるようになっていとも言える。そしてそのような距離をおいて見た結果、ビューヒナーは以前捉えた宿命論より深い認識へといたる。

ビューヒナーは、『ダントンの死』の中にダントンをロベスピエールとは違う立場から批判する者を登場させる。その登場人物の名前はマリオンである。マリオンはこの戯曲中一度しか登場しないが、その印象は強烈であり、非常に重要な役割を果たしている。彼女は貞節を美德とする母親に育てられたが、あ



る時、彼女の家によく出入りしていた若い男と関係を持ってしまう。それがきっかけとなり、その後の彼女にとって「対象は一つ」<sup>18)</sup>となり、男はみな性の対象以外のものではなくなる。彼女は不実を繰り返し、最初の男となった若い男は、彼女の不実を嘆き川に身を投げる。彼女の母親もそのような娘を心痛のたねとしてこの世を去る。しかし彼女は社会の倫理も規範も世間の非難も関係なく、ただひたすらに肉体の快楽を求め続ける。彼女は「私の性分はそういうものなんだし、誰もそこから抜け出すことなんかできない」<sup>19)</sup>と言い、その性分、本性に従い生きるのである。

このような彼女は、もちろんロベスピエールのように理性主義の立場から快楽主義者のダントンを批判するのではない。彼女は、快楽主義者であり理性や理性主義を批判するダントンを、理性的だと批判するのである。マリオンははっきりとそう批判するわけではない。しかし彼女のダントンに対するそのような批判は、次のような場面から読み取れる。それは、「なぜ、僕は君の美しさを全て自分の中に取り入れられないのだろうか。」<sup>20)</sup>と問うダントンに、マリオンが「ダントン、あなたの唇には目がついているの。」<sup>21)</sup>と言う場面である。このマリオンの台詞は、理性を捨てきれないダントンを指摘するものであろう。このような彼女の指摘は一体何を意味するのだろうか。

第一幕の終盤で、ダントンは理性主義のロベスピエールを激しく非難する。

「ロベスピエール、君は腹立たしいほど誠実だよ。僕だったら恥ずかしいね、ただ他の人が自分より悪い人間だということを知っているやらしく喜ぶために、三十年間も天と地の間をいつも同じ道徳的な顔をして走り回るなんて。

一体君の中に時々でもそっと静かに言ってくれるものはいないのかい？お前は嘘つきだ、お前は嘘つきだ！って。」<sup>22)</sup>

厳格な道徳によって自己の理想の国づくりへ向かおうとするロベスピエールは、常に人は理性によって動かねばならないと考えている。しかしダントンは、それは結局、自己満足のためではないのかと鋭く批判するのである。

そのように理性主義を批判した後、第二幕のジュリーとの会話において、ダントンは宿命論を認識しショックを受けるのである。しかしこのようにロベスピエールの理性主義を批判するものの、それでダントンが完全にロベスピエールを退けることができたわけではない。それは、結局ダントン自身も理性を捨ててきてはいないからである。マリオンのダントンに対する批判はその点での射ている。結局ダントンも自分の理性が作り出す理念を捨て去ることができず、彼は理性主義を否定しながら理性を捨て去ることができていない。たとえ

ロベスピエールの、厳格な理性主義を批判しようとも、革命家が目指すものは全て各々の理想国家であるわけだし、そこには理性が強く働くのが普通である。もしそうでなければ、革命家は自分の理想国家を思い描き、それを実践していくことなどできない。それはダントンも例外ではないはずである。

そして結局ダントンは宿命論的必然性を認識しながらも、最後にはなすすべもなく身を滅ぼしていく。これは前述したように、宿命論を認識しながら革命運動にあえなく失敗したビューヒナー自身と重なるものがある。結局「宿命論の手紙」を書いたビューヒナーにしるダントンにしる、彼らの宿命論の認識は革命という大きなうねりの中では全く何の役にも立たなかった。なぜならそれは彼ら自身が述べているように、結局は支配不可能な鉄の法則なのであるから。しかし支配不可能であると分かっていた彼らは、その法則を認識できると考えた。ビューヒナーも「宿命論の手紙」の中で、認識はできるという意味のことを書いている。しかし、そもそもその認識するということからして間違っていたのではないだろうか。

革命運動を実行に移す前の「宿命論の手紙」を書いたビューヒナーや、ダントンのように、どんな形であるにせよ、宿命論とはこのようなものであると捉え、口にした時点で、それはもう宿命論の根源的なところからは、ずれてしまうのではないだろうか。なぜなら、それにより宿命論はその広がり限定され我々の理性のうちに収まってしまうからである。そのように人間の理性により認識されてしまったものが、果たして宿命論と言えるのであろうか。宿命はどんな形にせよ捉えられないから宿命たり得るはずである。すでにそれを認識できる、認識したと考えることからして間違っているのである。もちろん我々は理性によってしかそのようなものを捉えることはできない。しかし理性によって捉えた瞬間、それはもう宿命論の根源的なところからは離れてしまう。そしてそのように我々の理性では捉えきれないからこそ、支配不能であり宿命論なのである。

そのことが表れているのが『ダントンの死』の登場人物マリオンである。ロベスピエールの理性主義を批判するダントンを、マリオンによって理性的であると指摘させることで、ビューヒナーはそのことを暗示している。そしてダントンは、まさに本性のまま生きているこの女性、マリオンに強い憧れを持つ。彼は自分が否定している理性というものを自分自身捨て去ることができないから、そのようなものをまるで問題にしないようなマリオンに強く惹かれるのである。彼女はまさに本性に従い自分の感性のまま生きていく。前にあげた「なぜ、僕は君の美しさを全て自分の中に取り入れられないのだろうか。」というダントンの台詞は、マリオンが理性によっては含み得ない存在の象徴であることを暗示しているのかもしれない。

『ダントンの死』におけるダントンの宿命論の台詞は、ビューヒナーが自分の心情を単純にダントンに代弁させているというだけではないのである。ビューヒナーはそのダントンをマリオンにより批判させることで、さらに以前より深い認識へと至っているのである。

しかし彼が認識したものはすでに簡単に言葉で表せるものではない。なぜならそれは認識したと思った瞬間、言葉で表した瞬間にもう別のものになってしまうのであるから。だからそれは理性で捉えた宿命論までもを包括的に含んでしまうような、理性では捉えきれないような「なにか」である。それは、我々の理性では捉えることのできないものであるゆえに、はっきりとは捉えることはできない。そのため結局それは、「なにか」とか「それ」としか呼び得ないものとなるのである。

だから、ビューヒナーはそれ以後の作品の中では、そのような必然性を『ダントンの死』の中でダントンに語らせたようには、はっきりと表さなくなる。もちろん『ダントンの死』におけるその必然性は間違った認識の例となるのであり、むしろこの戯曲全体に流れる不気味な雰囲気こそが、さらに言えばダントンたちを滅ぼしていくはっきりとは捉えられないなにかこそが、この戯曲におけるその「なにか」と呼び得るものかもしれない。

例えばビューヒナーはこれを戯曲『ヴォイツェク』の中では、そのままなにかわからないものとして *es* や *was* で表現する。それはそのまま捉えることのできない正体のわからないものとして戯曲の中に出てくる。<sup>23)</sup>「俺の後ろでも下でもなにか音をたてる。(地面を踏みつけて) 空っぽだ。聞こえるか?」(*Es pocht hinter mir, unter mir stampft auf den Boden hohl, hörst du?*)<sup>24)</sup>、「マリー、またなにかいたんだ。たくさん。……」(*Marie, es war wieder was, viel, ……*)<sup>25)</sup>、「俺の後ろを町の前までやってきたんだ。」(*Es ist hinter mir gegangen bis vor die Stadt.*)<sup>26)</sup>などの例をヴォイツェクの台詞からあげることができる。主人公ヴォイツェクは、最後には正体不明のそのなにかに突き動かされて殺人を犯し、身を滅ぼしていく。その正体はこの戯曲の中では最後まで「それ」とか「あれ」といった「なにか」のままであり、不明のままである。

さらに注目すべきことに、ビューヒナーは初稿<sup>27)</sup>においては、この「なにか」をヴォイツェクの言葉により説明しようとしている。初稿には次のようなヴォイツェクの言葉がある。

「全てはこわばり、じっとして、暗い。そしてその後ろでなにかが動いてる。じっとしていて、俺たちには捉えることのできない、俺たちを狂わせるなにかだ。」<sup>28)</sup>

このことからビューヒナーがこの戯曲で表したかった「なにか」とは、人間には捉えられない、しかし人間を狂わせるような巨大な力を持ったものであることが分かる。しかしその後の稿では、ビューヒナーはこのヴォイツェクの言葉を消してしまっている。そして先に挙げたヴォイツェクの言葉のように、「なにか」は説明されず、最後までそのまま不明のものとして描かれることとなる。初稿で書いたようにその「なにか」を直接言葉で説明することは、ビューヒナーの考えには反することであったことが、ここからも分かる。捉えられないものを、「捉えられない」と言葉にすることは彼にとってその広がりや制限してしまうことに他ならなかった。そうすることにより、その「なにか」は我々の言葉や理性の内の収まってしまうからである。ビューヒナーの『ヴォイツェク』の推敲は、そのような彼の考えを如実に示している。

『ダントンの死』について言えば、前述したように、戯曲全体を包みこむ雰囲気その「なにか」と言えるかもしれない。

この戯曲の前半は、ダントンとロベスピエールの対立が主となっている。しかし、ビューヒナーが、自分自身が以前書いた手紙と同じ内容のことを主人公であるダントンに語らせたからといって、単純にダントンとビューヒナーを同一視することはできない。だからといって、ダントンに対立するロベスピエールにビューヒナーを重ねることもできない。そして後半はさらにこの二人に対立するように、民衆の残虐さが際だって描写されるようになる。しかしビューヒナーが彼らに共感を寄せていたと考えるには、『ダントンの死』に描かれている彼ら民衆の言動は、あまりに残虐で無軌道なものである。

このダントン、ロベスピエール、民衆の姿は三者三様であり、ビューヒナーが誰の立場に主に立っているのかという問題は、解釈する人によって意見が分かち、それを確定するのは困難である。それは不可能に近いと言ってもいいかもしれない。ダントンは次々と首を切っていく革命に行き詰まりを感じ、途中で立ち止まってしまい破滅へと追い込まれる。ロベスピエールも同じように革命に行き詰まりを感じているのかもしれないが、彼は道徳とテロにより徹底的に革命を押し進めようとする。しかしその彼に待っているのは孤独である。最終的には彼もまた断頭台へ送られることはこの戯曲では描かれませんが、それは周知のことである。第一幕終盤の彼のモノローグは、ロベスピエールが自分の革命路線に対して疑問を持つことで、血の粛清に突き進む彼にも人間らしい一面があることを感じさせるとともに、彼の孤独を強く感じさせられる場面でもある。そして民衆は残忍なまでに無軌道な熱狂でもって、革命家を断頭台へと追い立てる。このように、この戯曲ではどの立場にもなんらかの批判の目が向けられている。結局この劇において、ビューヒナーは一つの立場に立ち続ける

ことはないのである。そして、そのため見る者も簡単にある一人に感情移入することは許されず、その視点も不安定なままとなる。

さらにこの統一されない不安定さは、各人物像の描写にも見られる。前述したように、理性主義を批判するダントンも理性に頼らざるを得ない。たとえ理性を捨てようにも、それは今まで自分の理念に従い多くの人の首を切ってきた彼が、簡単に捨てられるものではないだろう。一方ロベスピエールは厳格な道徳を説きながらも、ダントンに批判された後は自分の行動に確信が持たなくなる。また他にも、無神論者を自称していたショメットは、死を前にしてその自分の信念に疑いを抱く。同じく獄中にいたペインが無神論を説き、彼は落ち着きを取り戻すが、彼のその落ち着きが一時的なものでしかないことが暗示されている。ダントンが理性を捨てようとしても都合良く簡単に捨てられないように、彼もまた死を前にして都合良く神に救われることはないのである。

断頭台に向かう直前に牢獄の中でカミーユが言う台詞、「僕らはみな、悪魔にして天使、愚か者であり天才なのだ。そして全てを一つの身に持っているのだ。」<sup>29)</sup> という言葉に表されているような、このような人物像の描写により、劇全体が統一感を欠き不安定なまま進行することとなる。そして、それは上の視点の不統一とともに劇全体に不安定さ、混濁とした感じを与え、不気味な雰囲気醸し出す大きな原因となっている。

このようにして劇全体に流れる不気味な雰囲気こそが、『ダントンの死』においてビューヒナーが表そうと思った「なにか」ではないのだろうか。

これらの統一を欠いた不安定な劇の進行が、ビューヒナーの意図なのか、それとも革命運動に失敗し亡命したビューヒナーの心の揺れの現れなのかは分からない。しかしいずれせよ、一つの立場、視点に固定することなく、多様な面から革命を描き出し、それらが相まって、一種独特の不気味な雰囲気はこの戯曲全体に醸し出すというこの効果は、ビューヒナーが登場人物の誰かに自分を重ね合わせたのでは、決してできなかったことであろう。

では、ビューヒナーがこのようなより深い認識を持つに至った契機は何だったのか。「宿命論の手紙」から『ダントンの死』を書くまでの間にビューヒナーに起こったことといえば、それは革命運動の実践とその失敗に他ならない。彼が企てた革命運動はあえなく失敗し、彼は命の危険にさらされることとなる。その恐怖は彼にとって非常に大きいものだったことが、亡命後の彼の手紙からも分かる。

「ダルムシュタットを思うと、心が重苦しくなります。家や庭、そして思わずあの忌まわしい牢獄が目の前に現れるのです。」<sup>30)</sup>

(1835年7月16日 家族に宛てて)

このように投獄の恐怖を書いた手紙は、亡命後最初に家族に宛てて書いた1835年の3月の手紙に始まり、だんだんと減ってはいくものの、次の年の11月、彼が死ぬ三ヶ月ほど前に家族に宛てた手紙の中で、再び思い起こされている。

「僕のところに来た手紙によりますと、ミンニゲローデは死んだようです。それはつまり、彼は三年間いじめられて殺されたということです。三年間！フランス革命の血に狂った殺人鬼たちは、一人を殺すのにせいぜい二、三時間しかかけませんでした。宣告、そしてすぐにギロチンでした！それに比べて三年間！」<sup>31)</sup>

(1836年11月20日 家族に宛てて)

またチフスにかかり熱にうかされた彼は、警察に身柄を引き渡されるという妄想に苦しめられたという。<sup>32)</sup> ということはこのような思い、感情は彼が死ぬまで彼のもとを去らなかったのである。エリアス・カネッティはビューヒナー賞の受賞講演において、ビューヒナーの心はダルムシュタットの牢獄から離れることなく、拷問の恐怖、同士への負い目に心をとらわれ続けた、とビューヒナーの憂鬱について述べている。<sup>33)</sup> 幾度となく耳に入ってくる、捕まった同志たちの悲惨な様子と、そこからくる投獄や拷問の恐怖、そして自分の命の危険、そのようなものに直面したビューヒナーは、現実には自分の現実認識、鉄の法則の認識をはるかに凌駕することを悟ったに違いない。それどころか理性による認識をもはるかに越えるなにかの存在を感じたのであろう。

しかし、ビューヒナーはそのようにして感じたなにかの存在を、必ずしも否定的なものとは見なしていないようである。他の売春婦を、その容姿や病気によってけなすダントンも、理性によっては含み得ない存在を暗示するマリオンには一言も非難の言葉を発していない。それどころか称賛していると言っていだらう。本性のまま生きていくマリオンは、理性に頼り滅んでいったダントンとロベスピエールの両者に対照的であると言える。宿命論を実際に口にするダントンの中ではなく、このダントンやロベスピエール、そして彼らの理性に対置されている本性のまま生きていくマリオンの中にも、ビューヒナーは上で述べたような理性で捉えた必然性をも含み、それを越えるなにかを見ているはずである。だが、マリオンの登場場面は非常に少なく、当然ながら確かな形でその「なにか」が出ているわけではない。

しかし、前述したようにこのマリオンという女性は、モラルの崩壊など全く意に介さずに、自分の本性に従い自分の感性のまま生きていこうという女性である。あえて言うならばそのような彼女の生き方、さらに言えば彼女が従って

生きていく本性というものが、その「なにか」を感じさせてくれるもの、もしくはその「なにか」の一面なのではないだろうか。

ビューヒナーは『ダントンの死』を書いた直後に、グツコーに宛てた手紙の中で次のように書いている。

「つまり私のお願いとは、できるだけ早くこの原稿に目を通していただきたいということです。もし批評家としてのあなたの判断にかなう場合は、ザウアーレンダー氏に推薦していただきたく、また同時に速やかにご返事を頂きたいと思います。

作品自体について私が言えることは、不幸な状況のためせいぜい五週間で書かなければならなかったということだけです。私がこのようなことを言うのは、戯曲そのものの言い訳をする為ではなく、作者の状況に対してご考慮して頂けたらと考えてのことです。

この戯曲をどうしたものか、私自身には分かりません。ただ私に分かっているのは、どうしても歴史に対しては赤面してしまうということです。しかし、シェイクスピアを除いて、詩人というものは皆、歴史と自然を前にしては子どものように立ちつくしてしまうと考えて、自分を慰めています。

かさねがさね、速やかにご返答いただけるようお願い申し上げます。」<sup>34)</sup>

(1835年2月21日　　カール・グツコーに宛てて)

『ダントンの死』を執筆した直後の、『ダントンの死』をいわば売りこもうという手紙の中で、このようなことが述べられているということは興味深いことである。歴史と自然の前では無力であるというこの言葉は、そのまま『ダントンの死』のテーマを暗示しているのではないだろうか。つまりその「なにか」が自然であることは、ここからも推察できるのである。

本性に従うマリオンはまた、男と寝る時に、つまり本性に従い生きる時に「私はすべてを飲み込み、深く深く入り込んでいく海のような女となった。」<sup>35)</sup>とも言っている。この言葉もまた、本性がすべての存在を包み得るなにかの一面であることを暗示しているように思える。本性というものをビューヒナーがどこまで意識していたかは分からない。しかしビューヒナーが亡命後に自然科学研究に情熱を傾けたということを考えると、そしてマリオンの台詞「私の性分はそういうものなんだからしょうがない」(Meine Natur war einmal so)という台詞に「Natur」という言葉が使われていることを考えると、彼が『ダントンの死』を書いている時すでに、本性、そして自然というものが、この世界をとり

こみ支配する、人間には捉えきれないほどのものであるということを、かなり意識していたということは十分に考えられることである。

### 3. 結び

もちろん彼の自然観については慎重かつ詳細な議論が必要であるし、彼の革命運動と宿命論のつながりもより詳細に検討する必要があるだろう。彼の自然観の考察においては、彼が亡命後に書いた自然科学の論文や講演が大きな助けとなることであろう。

しかしここまでで言えることは、ビューヒナーにとって宿命論とは、以上見てきたように、はじめは自分の理性で捉えきれないものとして認識されていたが、革命運動の失敗を機に、彼にとってそれは理性では捉えきれない「なにか」となった。彼の戯曲『ダントンの死』や『ヴォイツェク』は、その捉えきれない「なにか」の存在を感じさせるものである。

そしてビューヒナーにとって自然こそがその「なにか」である、もしくはその「なにか」の一面であるということが、『ダントンの死』や彼の手紙には暗示されている。このことは、彼の興味が亡命後は自然科学研究に傾き、彼が熱心にその研究を行ったことから推察される。

人間の本性という人間を内側から支配する内なる自然と、人間やその歴史を包み込み世界そのものを支配する自然。亡命後、革命運動の失敗のため心揺れながらも、その偉大な力を改めて、そして以前よりずっと強大に感じたビューヒナーがそれを表す手段は、確かなものとしてではない、「なにか」という形で表すことだったのかもしれない。

テキストは Büchner, Georg: Sämtliche Werke. Hrsg. von Henri Poschmann unter Mitarbeit von Rosemarie Poschmann. 2 Bde. 1992 und 1999. Deutscher Klassiker Verlag. Frankfurt am Main を用いた。  
また以下のように省略記号を用いた。

DKV=Büchner, Georg: Sämtliche Werke. Hrsg. von Henri Poschmann unter Mitarbeit von Rosemarie Poschmann. 2 Bde. 1992 und 1999. Deutscher Klassiker Verlag. Frankfurt am Main.



Chronik=Mayer, Thomas Michael: Georg Büchner. Eine kurze Chronik zu Leben und Werk. In : Georg Büchner I / II. hrsg. von Heinz Ludwig Arnold. 1979. Edition text+kritik. München.

注

- 1) Chronik, S.374.
- 2) Chronik, S.377.
- 3) Chronik, S.374.
- 4) DKV, Bd.2, S.377, 378.
- 5) この手紙が書かれた日付に関しては、従来様々な議論がなされてきた。主に1833年の冬から1834年の3月の間で推論されることが多かったようである。最近では、Jan-Christoph Hauschildのように、当時の気候に関する報告を考慮して、1834年の1月の中頃から終りにかけて書かれたのではないかという見解も有力であるようだ。(Vgl. DKV, Bd.2, S.1098-1100.) Hauschild自身は1月10日から20日の間と推定している。(Vgl. Hauschild, Jan-Christoph : Georg Büchner. Biographie. Stuttgart, Weimar 1993, S.268-270.) ここではそのようなことを考慮しているDKVにもとづき日付をつけた。
- 6) Vgl. Mayer, Thomas Michael : Büchner und Weidig – Frühkommunismus und revolutionäre Demokatie, S.95-97. In : Georg Büchner I / II. hrsg. von Heinz Ludwig Arnold. 1979. Edition text+kritik. München.
- 7) DKV, Bd.2, S.375.
- 8) DKV, Bd.2, S.380.
- 9) DKV, Bd.2, S.385, 386.
- 10) DKV, Bd.2, S.18.
- 11) DKV, Bd.2, S.30.
- 12) ビューヒナーがこの時読んだ本についてはいくつかの推論が成されているが、確定はしていない。例えばThomas Michael Mayerは、ビューヒナーはチエールとミニエの歴史書を読んだのではないかと推定している。(Chronik, S.372.)
- 13) Vgl. Mayer, Thomas Michael : Büchner und Weidig – Frühkommunismus und revolutionäre Demokatie, S.91, 92. In : Georg Büchner I / II, hrsg. von Heinz Ludwig Arnold, 1979. Edition text+kritik. München.
- 14) 谷口廣治 : 『肉体と理念のはざま』人文書院 1997年 S.110-114.
- 15) Hauschild, Jan-Christoph : Georg Büchner. Biographie. Stuttgart, Weimar 1993, S.270-275.
- 16) DKV, Bd.2, S.378.
- 17) DKV, Bd.1, S.49.
- 18) DKV, Bd.1, S.27.
- 19) DKV, Bd.1, S.27.
- 20) DKV, Bd.1, S.28.
- 21) DKV, Bd.1, S.28.
- 22) DKV, Bd.1, S.33.
- 23) Vgl. 川原俊雄 : 『殺人者の言葉から始まった文学』鳥影社 1998年 S.13-15.
- 24) DKV, Bd.1, S.202.
- 25) DKV, Bd.1, S.204.

- 26) DKV, Bd.1, S.204.
- 27) 戯曲『ヴォイツェク』は未完であり、草稿が残っているのみである。この草稿はレーマンにならって、通例四通りに分けられる。初期の草稿と考えられるものの内、書かれた時期のより早い初稿Ⅰと書かれた次期のより遅い初稿Ⅱ、それらの後に書かれ完成間近であったと考えられる暫定的完成稿、そして他の草稿とは関連していない断片の四通りである。DKVもその四通りに分けている。ここで言う、初稿に書かれているヴォイツェクの台詞とは、そのうち初稿Ⅱに書かれているものである。そしてその台詞は、その後書かれた暫定的完成稿には書かれていない。また上にあげたヴォイツェクの台詞の引用、24)、25)、26) はすべて暫定的完成稿からの引用である。
- 28) DKV, Bd.1, S.192.
- 29) DKV, Bd.1, S.84.
- 30) DKV, Bd.2, S.408.
- 31) DKV, Bd.2, S.457.
- 32) Caroline Schulz' Tagebuchaufzeichnungen über Büchners letzte Tage, S.578. In: Büchner, Georg: Werke und Briefe. Hrsg. von Fritz Bergemann. 2 Bde. 13. Auflage, 1979. Insel Verlag. Frankfurt am Main
- 33) Büchner-Preis-Reden 1972-1983. Philipp Reclam jun. Stuttgart. 1984. S.9-31.
- 34) DKV, Bd.2, S.392, 393.
- 35) DKV, Bd.1, S.27.

## Büchners gewandelter Fatalismusbegriff in *Dantons Tod*

Takushi TAKEUCHI

Georg Büchner hat einen Brief an seine Braut zu Beginn des Jahres 1834 geschrieben, den sogenannten *Fatalismusbrief*, bevor er eine revolutionäre Bewegung ins Leben gerufen hat. In diesem Brief zeigt sich, dass Büchner die Wirklichkeit der Französischen Revolution verstanden hat und darüber hinaus den „Fatalismus der Geschichte“ erkannt hat. Die Erkenntnis, dass alles in der Welt dem „Fatalismus der Geschichte und der Menschennatur“ folgt und es keinen Platz für den freien Willen der Menschen gibt, hat Büchner stark erschüttert. Er glaubte, dass sich dieser Fatalismus nicht beherrschen lässt, aber zugleich hat er in dem *Fatalismusbrief* geschrieben, dass man ihn erkennen kann. Für Büchner hat sich der Fatalismus erstmalig in der Französischen Revolution als erkennbar gezeigt. Aber nach dem Misserfolg der revolutionären Bewegung wurde der Fatalismus für Büchner dasjenige, das nicht durch Vernunft begriffen werden kann.

Dies findet Ausdruck in den Worten einer Frauengestalt in *Dantons Tod*, Marion. Ihre Worte und Taten deuten an, dass der Fatalismus, der durch Vernunft begriffen werden kann, nicht der wahre Fatalismus ist, und die Fatalität ist das Etwas, das alle Vernunft völlig übersteigt. In seinen Werken *Dantons Tod* und *Woyzeck* können wir das unbegreifbare Dasein dieses Etwas fühlen.

*Dantons Tod* und einige Briefe Büchners deuten an, dass Natur genau das Etwas oder ein Teil von diesem Etwas ist. Das lässt sich unter anderem auch daraus schließen, dass sich Büchners Interesse nach seiner Emigration auf die Naturwissenschaften richtete und er sich ganz und gar der Naturforschung widmete.

Nach dem Misserfolg der Revolutionsbewegung hat Büchner die zu große Kraft der Natur gefühlt, der Natur, die die Menschen von innen beherrscht und der Natur, die die Menschen und die Geschichte umgibt und die Welt beherrscht. Nach der Emigration kann Büchner, der die Kraft der Natur als viel größer empfunden hat, sie in seinen Werken nur mit der nicht definierbaren Form, dem Etwas, ausdrücken.

